

本質主義への危険な接近

杉浦 鈴

評者は列島の中世史、特に集団形成に関する社会史を専攻しており、『抹消された快樂』に収録されたテキストの意味するところを理解しうるだけの素養をじゅうぶんに備えていないと自覚している。その上で本稿では、トランス差別に反対するいちアナーカ・フェミニストとして『抹消された快樂』を読み、可能な範囲で批判を加えてみたいと思う。

『抹消された快樂』は、いかにクリトリスが西洋社会において存在を抹消されてきたのか、いかにペニスやヴァギナに対して従属的な地位を迫られてきたのかを素描した上で、その立ち位置を転覆させようと試みている。その立場はマラブーいわく「ターフ（トランス排除的ラディカルフェミニスト）から距離を取るラディカル・フェミニズム¹」であり、同時に「フェミニズムの創始者たち」を「全面的にお払い箱」にしようとする態度は退ける、と述べられている²。

まず評者が感じたのは、マラブーが多用する「生物学的」なシンボルによって疎外される人びとがいるのではないかと、という懸念である。マラブーは表題の通りクリトリスを極めてシンボリックに扱っているほか、哲学言説の男性中心主義を「テストステロン濃縮物³」に喩えるなど、生物学的なレトリックによって政治的状況を表象する。単純に考えて、それは本質主義への危険な接近に他ならない。マラブーの言葉を信じるならば、マラブーの試みの目的は「生物学的なもの」と「象徴的なもの、身体と世界の肉のあいだでプラットフォームを組み立てること⁴」に当たり、むしろ「生物学的なもの」と「象徴的なもの」の架橋である。しかしながら本書においてマラブーは、結局「生物学的なもの」の名前で修辞された「象徴的なもの」を必要以上に拡張しており、それによって両者の関係性が対等であるようには読み取れなくなっているように思われる。クリトリスに快樂を象徴させるとき、たとえばクリトリスを持っているが下半身の神経が機能していない人物は、そこから排除されてしまう。その上でクリトリスを不服従の象徴とし、「クリトリスとはアナーキストなのである⁵」と述べるとき、私はアナーキストとして、極めて多様なありようの身体を持ち主と連帯・協働する余地をマラブーはいかに説明するのか、疑問を抱いてしまうのである。

また、マラブーはトランスフェミニズムについて以下のように述べている。

(…) ピルや更年期の補充療法を通じてホルモン含有物を摂取している以上、シス女性の身体はつねにすでにトランスなのではないだろうか。それゆえ、トランスフェミニズムの主体は女性でも男

¹ カトリーヌ・マラブー著『抹消された快樂』西山雄二・横田祐美子訳、法政大学出版局、2021年、19頁。

² 前掲書、20頁。

³ 前掲書、146頁。

⁴ 前掲書、155頁。

⁵ 前掲書、161頁。

性でもなく、まさに「ピルやテストステロン、バイアグラやツルバダなどの技術を利用している人々」なのである。(…)

無傷の身体は存在しない。薬理的な人工物や人工器官に侵されていない身体など存在しないのだ。この意味で、女性の身体だけでなく、あらゆる身体が製造され、しかも切除されたものである以上、脆いものなのである。⁶

すなわちマラブーは、あらゆる身体は何らかの介入を受けている以上、トランスフェミニズムの主体であると主張するのである。

ここではトランスパーソンのあり方が、身体に対する医療介入に集約される形で語られてしまっていないだろうか。トランスパーソンの中には、身体への医療介入を通じたトランジションを希望しない人びとも少なくない。マラブーの論に従えばそのような人も含めて人類はみな「トランス」である、ということになるのだろうが、身体になんらかの介入——文脈上、それは物理的介入として読み取れる——を受けている、という意味で「トランス」を運用するとき、社会的なカテゴライズとしての性＝ジェンダーに違和があるために不当な差別を受けている人の苦境、特にシスジェンダーとの間にある格差は、まさに「抹消」されてしまいかねない。格差の「抹消」は、トランスパーソンの経験の無化であり、現状の社会において極めて暴力的に作用する。

以上の二つが評者の疑問点である。マラブーの議論は野心的ながら、危うい本質主義への接近を回避し切れていない、ないしはターフから距離を取るための説得が足りていないように思われる。列島社会におけるトランス差別は、2018年夏にお茶の水女子大学がトランス女性の受け入れ開始を発表してから急激に可視化され、2022年現在も極めて暴力的な言説がSNSを中心に流布している。このような現状に対してどのような抵抗の言説が構築可能であるか、あらゆる差別を容認しないアナーカ・フェミニストの立場から試行錯誤を重ねることが、今後の評者の課題である。

※『抹消された快樂』の読解にあたっては、浜崎史菜さんより多大な教示を得た。この場を借りてお礼申し上げます。

⁶ 前掲書、128頁。鉤括弧内はポール・B・プレシアドからの引用。